



Title	白く消去する隠喩
Author(s)	高橋, 吉文; Takahashi, Yoshifumi
Description	特集. 隠喩: はじめに = Metapher (Metaphor): Einleitung
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 58, 1-1
Issue Date	2010-05-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/43192">https://hdl.handle.net/2115/43192</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	MSC58-001.pdf



## 白く消去する隠喩

高橋吉文

ここに掲載する4本の隠喩論は、北海道大学メディア・コミュニケーション研究院の構成員を中心とする研究グループ「メタファー研究会」への助成、平成17年度～20年度科学研究費補助金、基盤研究(C(2)) No.177520139「メタファーとメタ思考——近現代ドイツ文学の場合」(研究代表者吉田徹也、平成17年10月追加配分)の研究総括として書かれたものである。特集テーマの特殊性から4本に限定されている。隠喩特集としては5度目となる。掲載された論考はいずれも、文学、西洋思想史、社会学、哲学の各分野における隠喩と形而上学との屈折した関わりを考究している。

最初の山田論文は、秩序へと同一化統合を行う隠喩的思考に支えられて形而上学を確立した西洋キリスト教世界(新約聖書)を、切断と未完成を旨とするユダヤの換喩的思考法(旧約とトーラ)によって相対化し、他者の読解が隠喩による包摂や支配となる西洋世界の基本性向に警鐘を鳴らす。続く大木論文では、20世紀ドイツの作家ベルンハルト最後の小説『消去』を解読して、秩序へと同一化しゆく隠喩群が、死にゆく者の最期の眼が繰り出す隠喩によって次々と消去されてゆく世界劇場光景をあらわにしていく。つまり、隠喩には実は差異(切断、消去)と同一化(接続、秩序構築)の二重性があり、それが大木論文では相反する二種の隠喩の相克として、また山田論文では換喩と隠喩として考究されていたのである。隠喩が帯びるそうした差異化と同一化の二重性は、続く鈴木論文では一次的(オブジェクトレベル)／二次的(メタ観察レベル)からなる情報システムとして読み替えられる。メタレベルが自律しメタ思考として抽象度を極大化していく時、西洋形而上学が出現するが、デリダはその要となる二次的な隠喩群を脱白・消去することをめざし、社会学者ルーマンも、同じく二次的隠喩が強固に捏造する実体幻像を、差異と観察による機能性へと脱色し、消去しようとする。最後の高橋論文は、3論文の基本となっていたブルーメンベルクの『世界の読解可能性』における絶対的隠喩概念を検証し、人間に引き寄せた読解可能性が不確定性によって消去されていく経緯を明らかにしている。隠喩は、一方では同一化の魔術で秩序を築きあげ、他方では換喩や変態同様に、切断と差異化を花咲爺さんのようにまき散らして、世界を世界劇場がはねた後の白い無へと消去していくのである。